

学校目標『夢・笑顔・命』の具現化に向けた取組
— 温もり実践が支える、子供の『所属感』と『基礎学力』 —

兵庫県神戸市立中央小学校

教諭 藤岡 大樹

I はじめに

本校は、平成9年に4校が統合された、開校20年目を迎える学校である。4校の統合ということもあり、校区は広く、深夜まで営業する飲食店や遊技場が密集する神戸の繁華街の中心を含むことから、青少年の健全育成という点では大変難しい課題がある。

また、家庭環境もさまざまで、生徒指導上あげられる問題行動は、決して少なくない。また、基本的な生活習慣がしっかりと身につけていないことや、生活の基盤となる体力が十分でなかったりする子供が多い。そのため、意欲や集中力、根気が持続せず、学習の定着という点で、大きな課題を抱えている。その反面、不登校傾向の子どもは比較的少なく、なかには、先生や友だちを求めて、早くから登校する子もいる。他校と比べると、塾など、習い事をしている子も少ないため、学校の果たす役割の大きさを一層感じている。

【学力調査等の結果より】

II 主題設定の理由

1 「学校目標」のズレ

本校は開校以来、「夢・笑顔・命」を学校目標に掲げ、日々教育活動に取り組んでいる。

夢＝未来を切り開く「力」

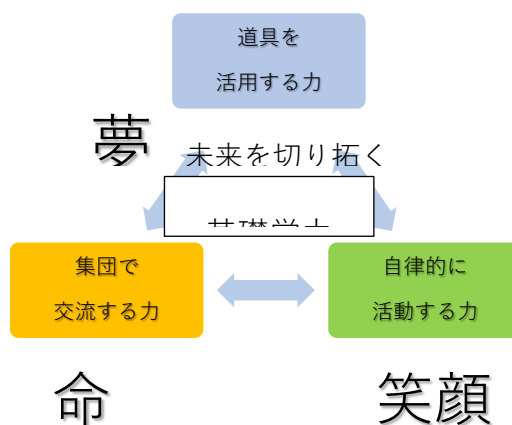
笑顔＝前向きに取り組む「態度」

命＝自分も友達も大切にする「感性」

「夢・笑顔・命」の言葉は開校以来継承され、大事にされている。しかし、実際の子どもの姿に目を向けると、将来の夢はおろか、目の前のことさえ、すぐに投げ出してしまったり、あきらめてしまったりする子供がいる。ルールを簡単に破ってしまったり、平気で友達を傷つけてしまったり、正しい人権感覚が身につけていない子供が多い。など、学校目標とかけ離れた実態が見え隠れしていた。

2 「学校目標」と「学校で学ぶ力」

そこで、職員全体で学校目標と子どもの実態のズレを見つめ直し、学校で学ぶ力について整理した。



自分も、友だちも大切に^{大切にする感性}する態度が提唱するキー・コンピテンシー「世界標準の学力」の概念と、本校の学校目標を照らし合わせて考えたイメージ図である。これらの基礎的な力を『基礎学力』と位置づけた。狭義に、学力＝国語や算数などの教科的な学習ととらえるのではなく、人間的な価値を高めること＝「学力」と位置づけることで、教師一人ひとりが目指す子どもの姿を一致させることができた。

3 『基礎学力』を根底から支えるもの

職員全体で【学校目標＝学ぶ力】の共通認識は図れたものの、その入り口に立つことができていない子どもも存在することが話題にあがった。

①学習に参加しない子がいる。

②友達と些細なことでトラブルになり、授業が成立しないことがある。

学ぶべき力（ゴール）は見えても、スタート地点に並ぶことができない子どもがいること。その子たちを学びの土台にのせるためにできることは何か？それは、何より、学校を自分の居場所にしていくことであると考えた。「ここにいる、いいんだ。」という実感（＝「所属感」）。心と体をまるごと預けることができる学校を目指していくことの重要性を再確認した。

どんなに子どもの学びになる実践であっても、教師一人ひとりの願いが「温もり」となって子どもに伝わ

らなければ、学ぶ力を支えることはできない。そこで「温もり実践」を、学校全体で推し進め、学校目標の具現化に向けて一歩ずつ歩み始めた。

III 実践の経過

1 「整流」

これまで学校全体で取り組んでいる教育活動を見直すことから始めた。活動にはそれぞれのねらいがあるものの、そのねらいが、学校目標「夢・笑顔・命」の何に位置するのか？それらを支える基礎学力の目標は何なのか？そこに、子どもが実感すべく「温もり」があるか？徹底的に見直した。開校以来、たし算しつづけてきた教育活動を、学校目標の具現化を図るために必要なものは残し、子どもの実態にそぐわないものはなくすための議論を重ねた。流れを整えるという意味で、「整流」がスタートしたのである。

【「整流」の対象にあがった、教育活動】

朝会、オアシス当番（教師の見守り週番）

△毎週行っているが、話が聞けていない。

△整列行進ができない。△週のめあてが守れない。

読書タイム（火～金）8：25～8：40

△静かに本が読めない。

△何のために読書をさせているのか？

基礎学力タイム（漢字・計算タイム）

（月～金 13：40～13：50）

△解けないからおもしろくない。

△力がついているか、見えないまま続けている。

さわやかタイム（朝の運動）年間12回

△運動が大事なのはわかるが、それぞれの活動がばらばらで、評価がしにくい。

わくわくタイム（縦割り遊び）年間12回

△ねらいがあいまい

△何のために子供が集っているのか？

2 学校目標との整合性

それぞれの教育活動を簡単になくしてしまったり、新たに加えたりするのではなく、学校目標「夢・笑顔・命」に照らし合わせて、「これらの目標が達成できたら、学校目標に一步近づける。」という考え方で具現化に向けて動き出した。

3 「整流」後の取組（一例）

朝会、オアシス運動

夢＝学校生活で起こるさまざまな問題や時間の移り変わりに気づき、自分なりの目標をもつ。

笑顔＝きまりを守り、基本的な生活習慣を身につける。

命＝全校で一同に集う良さ・一体感を味わう。

具現化に向けて

○「中央ひとのび10の約束」の作成。

朝会では、職員が当番を決め、子どもの実態に応じて週のめあてを決めたり、休み時間や放課後の様子を見守ったりしていた。しかし、目標を設定する際、子どもの問題に目を向けて対応するケースが多かったことから、次のような約束を、学校全体で定められたルールと決め、全職員で子供を見守る姿勢を作った。

第1条：言葉遣いは正しく、しっかり「はい」と返事をします。

第2条：『オアシス』あいさつを大切にします。

（おはよう。ありがとう。しつれいします。すみません。）

第3条：学校で使う道具を大切に、正しく使います。

第4条：正しい姿勢、正しい鉛筆の持ち方で学習します。

第5条：時間を守ります。（登校、休み時間、掃除、給食、下校）

第6条：廊下や階段はみんなの通り道。静かに右側を歩きます。

第7条：給食はマナーを守って、楽しくおいしくいただきます。

第8条：「もくもく掃除」で、中央小を美しくします。

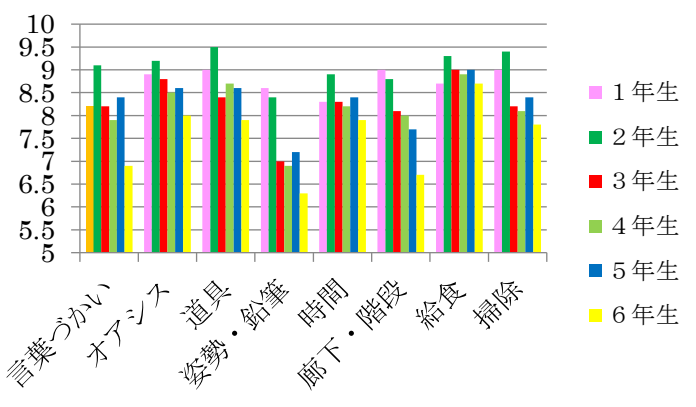
第9条：【自分で目標を決める。】

第10条：やることはやる。

あたりまえのことを あたりまえにできる 中央の子！

自分、仲間、学校を大切に、一日がんばります。

この目標は、学期ごとに、子供自身にも振り返る時間を取り、（10点評価）結果をフィードバックすることで、具現化に一歩ずつ近づけていこうと考えた。



【10のひとのび自己評価】

○行進お手本クラス

行進の曲を、校歌をアレンジした曲にして、学校を上げて行進・整列を大事にする。(朝の体を起こす。)週ごとにお手本



【お手本クラスの行進の様子】

クラスを設定し、あいさつや行進などを他学年・他クラスに見せることで意識を変えていくことを大事にしている。「見られる」という意識が、子供たちの姿勢や行進を変え始めている。

ここが、「温もり実践」

朝会で話す今週のめあては、単にルールの設定を行い、子供に伝える形ではな



【朝会指導の様子】

く、教師が、事例を劇化して、問題点と、あるべき姿を見せるように工夫する。その際、本校のマスコットキャラクター「チュッピー」を登場させ、子供の心に入りやすい話に換えて伝える工夫を行っている。

読書タイム

夢=本を読む習慣をつけ「ことばにふれる」機会をもつ。

笑顔=朝から本にふれることで、気持ちを落ち着けることを習慣にする。

命=本を通して、自然や周囲の人やものに関心を広げる。

具現化に向けて

○「おはよう読書」に読み聞かせ。

読書タイムは、朝、子どもが席に座るための「生徒指導的な意味合いが強く、読書活動そのもののねらいが薄かった。そこで、読書で身につけたい力をねらいに加え、職員で共通理解をした。また、本に親しむ習慣を具現化させるために、もともと、学期に一回行っていた、教師や地域のボランティアによる読み聞かせを毎週一回に増やした。本が読めない子どもも、読み聞かせなら興味を示すことが見えたからである。

学期に一度の読み聞かせは、従来通り、低・中・高学年ごとに本を事前に一覧表で紹介し、選択した本のもとに集まる「おはなしシャワー」を行っている。

【教室移動】

これに加え、週に一度の読み聞かせは、担任の想い入れのある本や聞かせたい本、子どもの希望に添った本を読んでいる。学年3クラスで相談し、担任が入れ替わって、読んでいることもある。【教室移動なし】毎週金曜日の読み聞かせを楽しみにしている子ども増え、生徒指導的な意味合いから、読書そのものの力に意識が向き始めている。

ここが、「温もり実践」

子供が読んでほしい本の紹介をしたり、子供同士で本の貸し借りをするミニ図書館を作ったり、本を通して、子供同士の交流ができるように促している。

基礎学力タイム

夢=漢字や計算の力を高め、学習にいかしていく。

笑顔=学習に向かう習慣を身につける。

命=自分自身の力について知り、目標をもって学習に取り組む。

具現化に向けて

○「漢字検定」の教科書を作成。

漢字検定は、一小一中の関係である中学校との話し合いの際、「漢字が読めない・書けない、中学生が多い。」という話から、「漢字の読み書きができる子に…」と考えられた。しかし、漢字と言っても、小学校で習う1006字を熟語にすると、その数は膨大である。また、検定を年に3回行っていたが、進級する機会も限られており、取り組む⇒思うように結果につながらない⇒やる気がでない⇒力がつかない。という負のスパイラルに陥っていた。

そこで、漢字検定を、基礎の基礎に立ち返り、一級20問の一字問題を新たに作成した。(60級)。熟語は使用頻度の高い問題を選んだ。また、学期に一度行っていた検定も、月曜日～木曜日に自己で検定に向けて練習を行い、毎週金曜日に検定を行うことにした。基礎学力タイムでは、子供の力のベースアップを目標におき、子供のやる気を引き出す



ことを大事にしようと考えた。

ここが、「温もり実践」

これまでプリントで学習を進めていたが、問題の見直しとともに、一冊の漢字の教科書として、子供に配布。保護者の理解も求め、毎年1年次に購入してもらい、6年間使用している。



【検定問題】

教科書には、問題のみのペー

ジ、答えが載っているページをわけて掲載し、自分自身で学習を進めていけるように工夫した。

また、成り立ち・三字、四字熟語、小学校で習う当て字、間違いやすい漢字の一覧、学年新出漢字画数一覧等も資料としてとじ込み、漢字に対する興味が広がるように工夫した。表紙デザインも、夢に向かって飛び立つキャラクターをあしらった。「自分たちの学校にだけある教科書」として、大事にしている。

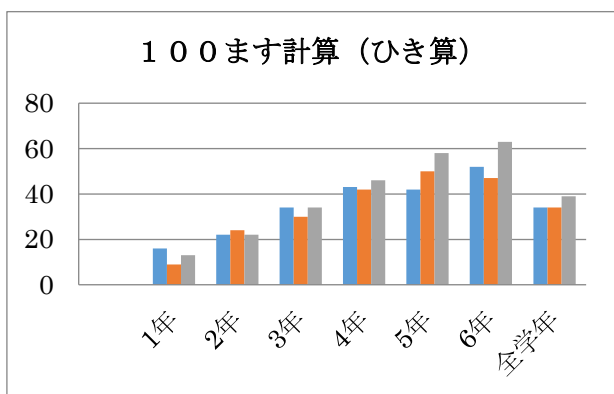
○100ます計算

計算タイムでは、100ます計算を行っていた。これを「やりっぱなし」にせず、年度末に一分間の正答数をデータにとり、伸びを可視化してきた。また、100ます計算の結果が計算力につながっているか分析するための進級テストも行っている。

ここが、「温もり実践」



左利きの子にも易しく、視覚的支援につながる専用のプリントを作成した。また、自身で目標タイムを記録する枠を作り、毎回の取組にやる気もてるよう工夫している。さらに、今年度から、月曜日＝たし算、火曜日＝ひき算、水曜日＝かけ算、木曜日＝わり算（金曜日＝漢字検定）とし、四則演算を繰り返し行うようにし、確実な底上げを図っている。



【1分間チャレンジ正答数（25年～27年度）】

さわやかタイム・わくわくタイム（縦割り遊び）

その他、子供の体力・体幹を支えるものとして、兄弟学年でペアを作り、なわとびに取り組んでいる。（さわやかタイム）また、縦割り班（わくわくタイム）では、6年生を中心に活動が進められるよう、フォークダンスや長なわなどに取り組み始めた。

【漢字の教科書】

学校の具現化に向けて、具体的な目標を設定している。活動を絞ったことで、子供中心に進められるようになり、子供の「所属感」のきっかけを作っている。

IV 実践のまとめ

学校目標の具現化の声を上げ、4年の月日が経った。子供たちの姿は当時と比べ少しずつ変わりつつある。一つは、各取組が確実な成果として表れ始めていることである。特に、漢字検定の進級状況や100ます計算のタイム、なわ跳びの回数記録は確実に伸びている。

さらに、顕著に変わった面は、冒頭の課題にあげた、「所属感」である。「整流」できたのはわずかな取組に過ぎないが、明確なねらいをもって学校を上げて取り組んだことは、確実に子供の姿に表れることを知った。今年、6年生にあるアンケートを実施した。

「Q あなたは、学校が好きですか？」

この質問に対し、「好き」と答えた子供は52名、「まあまあ好き」と答えた子供は24名、これが、全体の93%を占めた。取組を始める以前に同様のアンケートを実施したわけではないが、当時の子供たちの姿とは考えられない結果である。アンケートの記述の中には、「私たちのためにやってくれていると感じる。」「先生たちが（朝会で）面白いことを考えてくれる。」「うちの学校にだけあるものが多い。」「学校のノリと雰囲気がいい。」

など、温もり実践が子供の声として返り始めていることも実感した。

一方、「あまり好きではない」「嫌い」と答えた子供がいたことも忘れてはならない。また、「勉強は嫌いだけど、学校は好き。」と答える子供が求めている声は何か、真摯に受け止めていく必要もあるだろう。

「整流」による学校目標の具現化に向けた取組は、今まさに始まったばかりである。今後、子供一人ひとりの「夢・笑顔・命」に寄り添った取組は学校全体でさらに加速していくこと。そのために、今回の「温もり実践」をヒントに、学びの本質である「授業」にも切り込み、子供が「力がついた」と実感できるものを、

中央のスタンダードに据えていくことが求められる。

開校 20 年という節目に際し、本研究が、子供一人ひとりと関わる教師の一步につながることを学校全体の願いとし、報告のまとめとする。